

## 日本英語教育史学会 会報

264

2014 年 8 月 27 日

**HiSET** *Society for Historical Studies of English Teaching in Japan*

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

学会ウェブサイト <http://hiset.jp/>

日本英語教育史学会 (代表 江利川 春雄)

【事務局】和誠堂文庫

〒121-0011

東京都足立区中央本町 5-10-22

e-mail: [membership@hiset.jp](mailto:membership@hiset.jp)

口座 (名義) 日本英語教育史学会

ゆうちょ銀行: 00150-3-132873

三菱東京 UFJ 銀行 千住中央支店

(普通) 0997182

## 第248回研究例会報告

2014 (平成26) 年 7月20日 (日), 拓殖大学国際教育会館 (東京都文京区大塚) において, 第248回研究例会が開催されました。例会では、「日本社会と英語—寺沢拓敬著『「なんで英語やるの?」の戦後史』を素材に」というタイトルでシンポジウムが行われました。提案者は寺沢拓敬氏 (日本学術振興会特別研究員PD)、指定討論者は榎本剛士氏 (金沢大学) と青田庄真氏 (東京大学大学院生)、コーディネーターは江利川春雄氏 (和歌山大学) で、出席者は49名でした。

以下に出席者の感想を掲載します。ご参照ください。

◇ ◇ ◇

◆自著を読むという企画などでは著書の梗概に加えてその裏話や苦労話の披露ということに終わりかねないところ、著者自身によるポイントの明確化に続いて指定討論者による **critical comment** の発表が生まれ、さらにそれを基にフロアーとの意見交換がなされることで、期待していた通りの **exciting** な例会となりました。著者と近い年代の討論者を選ばれたことも今日の議論を活発なものにした要因になったかと思われ、学会紀要での会員著書の書評に若手・中堅を起用するとの方針とあわせ、学会の次世代を育てることにつながることに期待しております。

&lt;Dragon&gt;

◆これだけアカデミックで白熱したコミュニケーションの場に立ち会うのは初めてでしたので頭が追いついていきませんでした。しかし、今まで考えもしなかった難しい視点からの意見が伺えてとても参考になりました。「なぜ英

語をやるのか?」ということの本日のこともふまえながら自分なりに考えながら英語教師を目指していきたいとおもいます。本日はありがとうございました。

&lt;匿名希望&gt;

◆斬新的な企画での発表計画でした。発表者の英語必修化の捉え方に対しその内容に関し2名の読者の意見・反論・疑問等で進めるこれまでにない形式で良かったと思います。青田、榎本両氏の英語教育の目的論については目的に則してではなく遡及することで合理化するという捉え方はこれからの英語教育に不可欠なことと思います。

&lt;K.S.&gt;

◆「本質主義」「実態 (化)」「ウチ」「ヒト」「×として」「内在的」「外在的」「語り」で明示化されているもの、排除されるものへの配視、「ルサンチマン」= (国民の声) という視点、「個人史」的英語教育論等、さらに勉強したいと思います。

&lt;ゼメシ&gt;

◆今日は私が今まで参加した学会とは異なり、同じテーマで進められ、討論を含むものでした。英語教育史を学ぶ以前に、私は学術的な討論がいかに行われるかをこの目で見て圧倒されました。背景知識がないために学会の内容について完全には理解できませんでしたがそのような部分においても勉強になりました。

学会ではまず始めに 寺沢先生がご自身の博士學位論文として書かれた『「なんで英語やるの？」の戦後史』という本について詳しく説明してくださいました。戦後、どうして英語が必修科目として中学や高校で教えられるようになったのか、それは様々な要因が作用してのことではありますが、とても興味深いことでした。私たちは今まで当然のように英語を学んできましたが、それはごく最近に始まったことです。

当初は英語を必修化することに英語の専門家や教師でさえ反対していたそうですが、それが現在では一転して小学校や幼稚園のうちから学ぶ科目となりました。それは日本がどんどんグローバル化していつているからだと思いますが、英語が必修科目になったのもそのような理由により英語を必要とする機会が増えたからだと勝手に思っていました。しかし実際は日本のグローバル化が始まった年代と英語の必修化が始まった年代は異なっていることを知って驚きました。

また、今では英語が嫌いな生徒もたくさんいますが、昔の人はアメリカへの憧れや英語への大きな憧れを持っていたことを知って、英語を当然と思っている私たちももう一度そのような気持ちを持つべきだと感じました。英語が必修化に至った明確な理由が分かっていないのは少し意外な気がしましたが、このような研究発表を聞くことはとても勉強になりました。英語教育史学会に参加させていただいたのは今回で2回目ですが、英語を学ぶ一人として英語教育を歴史的に見つめるのはとても興味深く感じました。

<bookmark>

◆今日学んだことの一つは、「温故知新」の考え方そのものでした。やはり、その知見から何を得られるのか、どういうことに活かせるのかが重要だと考えました。

もう一つは、どのような観点からも英語教育学へのアプローチは可能だということでした。「この世に関係ないものはない」とよく言われますが、その通りでした。これからも私のアンテナの張り具合を強化し、物事を点ではなく線、あるいは面で捉えられるようにできればと感じました。

最後になりますが、今日の学会発表は、英語教育史が専門ではない方の発表ということで、かなり難しい用語が飛び交っていました。ですので、もっと私の中の知識を洗練し、学会に臨むべきだと感じました。また、新たな知見を手に入れたので、私の今後の研究に使って見たいと思いました。

<Kawada>

◆私は、今まで学会というもの自体に参加することがなかったので、初めて参加して刺激を受けました。まず、私たち学生も参加することができますが、さまざまな大学の先生方も参加されていて、最後に行われた全体討論で繰り広げられた討論で英語教育について新しく知ることもありました。また、さらに知識を深めることができましたと思います。

学会に参加されていた先生方は、団塊の世代か、またはその下の世代で、ある先生の子供の頃は、親が英語教育に対してもものすごく熱心で、母から英語を教わり、自分も母のために必死になって勉強し、そして愛知万博があった時、多くの人がアメリカの展示を見るために長時間並んだとおっしゃられていた。そのくらいその時代に英語教育に対する関心が集まっていたということがわかりました。

今回扱われた著書は、みんなが英語を学びたい。また英語を教えたいという意識が高まった。などという内在的な理由ではなく、外在的な理由で必修になったとする見方であったので、私にとって、難しい内容でありましたが、とても

勉強になりました。ゼミが始まればこのような学会に参加する機会が増えると思いますが、今のうちから参加して刺激を受けることも大事だと感じました。また機会があれば参加したいです。

<Milestone>

◆ 普段聞き慣れていない難しい言葉もありついて行くのが少し大変でしたが今まで考えたことのない新しい視点から英語教育について考えることができ、とても刺激的な時間を過ごせました。

寺沢先生は英語必修化の促進要因としていくつかの仮説を立てられ、また必修化の阻害要因についても述べられていました。私が最も印象に残ったのは阻害要因の一つとして、戦後の学習指導要領で「全員にニーズのない科目は必修化すべきではない」と明言されていたということでした。自分が教員となれた際には「私は将来英語使わないのに何で英語を勉強しなきゃならないの」と生徒に聞かれることがあるかもしれません。そのようなときにあわててしまわないように今回、寺沢先生に教えていただいたことを踏まえ、自分なりに「なぜ英語をやるのか」をしっかり考えていきたいと思いました。

またこの学会ではアカデミックなコミュニケーションという聞き慣れない言葉も学ぶことができました。今後は私も他の人の意見を受け入れつつも自分の意見はしっかり論理的に述べ、アカデミックなコミュニケーションが出来るように教養を高めていきたいと感じました。

今回は学会に参加するということが体が不慣れで自分の勉強不足も痛感しました。しかし、教員になるには頭に入ってきた情報を即座に処理し理解するということが重要になると思います。なので、これからはもっと積極的に学会などへ足を運んで訓練していきたいと思いました。このような貴重な体験が出来て本当に良かったです。

<Eri>

◆ 一つの題材をもとに多くの先生方のさまざまな考え方を拝聴でき、自分の英語を取り組む際のとても良い刺激になりました。

現在では中学校で英語を学習することは当たり前になっていますが、中学校の英語が（事実上の）必修化になったのは戦後からです。寺沢先生はなぜ戦後に英語が必修になったのかを様々な社会的背景をもとに仮説を立て、分析し、「英語の必修化は偶然の産物である」という立場をとられました。

戦後の政治的、経済的な時代背景が外在的な要因となり、偶然にも英語科へ作用したという主張は今までに考えたこともありませんでしたし、英語が好きで学ぶ者として衝撃を受け、同時にとても興味深く感じました。また、議論の際にこの時代を経験されている団塊の世代の先生方の話も、その時代を知らない私にとっては初めて聴くことが多く、とても勉強になり、また、今まで以上の興味をそそられました。

前回に引き続き今回も参加させていただきましたが、毎回自分の未熟さを実感するとともに、知識の大きな収穫、そして学習意欲も駆り立てられ、本当に良い刺激を受けております。次回は広島県で行われるということで物理的には行けませんが、またこちらで行われる際には参加させていただきたいです。

<Inaho>

◆ 寺沢先生のお話は英語が初めは選択科目として始まった後、いかにそこから必修科目となったか、何が必修化促進要因であり、何が阻害要因であったのか、ということについてでした。その中で、一番私の心に残った点は、中学英語を必修化する正当性は何か、そして、「全員にニーズのない科目は、必修化すべきでない」という戦後新教育の理念に対する答えを出さないうまま、英語が必修科目になったという点です。

今でこそ国際化などという言葉があるように、日本に訪れる外国人数、海外に出て行く日本人の数を考慮すると、英語を学ぶ必要がある学生というのは多いと感じますが、戦後の英語の必要性というものは少ないものであったと

思います。そういった状況にも関わらず英語が必修科目になった要因をお聞きするのは、英語が必修科目であることに何の疑問も抱かない私としては、非常に興味深く感じました。

現代でも、英語を学ぶ必要なんてない、英語が苦手だし嫌い、と考える学生は少なからず居ると思います。機械翻訳といったものもさらに進化する可能性があると思います。また、英語をほとんど使わずに国内で一生を終える方もいると思います。そういった状況の中で、もし、仮に自分が教育者になったとして、生徒に英語学習の必要性を説く、英語を学ぶ目的、理由と

いったものを教えるとなった際の難しさを感じながら、講演をお聞きしました。私自身も、英語学習の必要性について改めて考えさせられるような学会のテーマでした。

<Astroriver>

\*今回いただいた感想の中に、字が薄く正確に判読できないものが数枚ありました。誤判読すると良くないと思いましたので、掲載を控えさせて頂きました。お書きいただいた方には大変申し訳ありませんが、事情についてご理解いただければ幸いです。

(会報編集担当より)

## <シンポジウムを終えて>

寺沢 拓敬 (日本学術振興会特別研究員 PD)

まず、拙著を議論の素材にして頂いたことに感謝申し上げます。当日は、本書の概要を述べた後、以下のようなディスカッショントピックを提示しました。

### (1) 外在的要因の偶然の作用による英語教育の制度形成

中学校英語の事実上の必修化には、英語教育の内部の事情よりも、外在的な要因 (入試制度や人口動態、就労構造の変化など) が重要な役割を果たしたことを示しました。そのうえで、英語教育史研究でも、内在的要因だけでなく、外部の構造的変化も検討の俎上に載せる必要があることを議論しました。

### (2) 義務教育段階での英語教育目的について

多くの英語教育学者が提示してきた目的論には、全ての「国民」に英語を「強制」する正当性が必ずしもないことを示しました。そのうえで、より堅牢な英語教育目的論を創出するにはどうすればよいか議論しました。

### (3) 「日本人と英語」を研究するうえでの諸問題

しばしば安易に設定される「日本人と英語」という分析枠組みには深刻な問題点があることを述べ、本書がその問題をいかなる方法で乗り越えようとしたか論じました。

当日は、参加された皆様とたいへん有意義な議論ができました。誠にありがとうございました。



榎本 剛士 (金沢大学)

大変刺激的なディスカッションに「指定討論者」という立場で参加する機会を与えて下さり、心から御礼申し上げます。寺沢氏とは研究のアプローチがかなり異なるのですが、私自身の視点から、いくつかの問題提起をさせて頂きました。

私は、今回の寺沢氏のご著書から、①(分析概念を含む)研究方法の有効性と限界の意識化、②「目的論」(および、「本質論」という「語り」の方法)そのものに対する批判的視座、という重要な示唆を読み取りました。多様なアプローチからの様々な研究が相補的に機能するためには、①が不可欠です。また、「制度」と「人間の意思(意識)」の間において、両者に(間接的に)影響を及ぼしているかもしれないものを見据えようとするならば、きっと②が必要になります。

ここで、唐突かもしれませんが、「これまで英語教育史学会を牽引し、導いて下さっていた先達の先生方の目に、今回の議論はどのように映る(映った)のだろうか」という疑問が、どうしても私の心に浮かんできます。或いは、この疑問すら、『「なんで英語やるの？」の戦後史』が暗に提起する問題の一部なののでしょうか。



青田 庄真 (東京大学大学院生)

この度、経験も実績もない筆者に指定討論者という身に余る大役の機会を与えて頂きました。まずは、このような大変貴重な機会を与えて下さった江利川先生、英語教育史学会に感謝申し上げます。また、大変未熟でお聞き苦しい発表に最後までお付き合い下さいましたみなさまにも、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

筆者が考える本書の魅力は、やはり英語教育史に歴史社会的アプローチとの接点を見出した点です。筆者を含め、今後後を追っていく者にとっては、本書はまさにこの道の教科書となるものです。シンポジウムでは、その歴史社会的アプローチに関して方法論的な問題提起を試みたのですが、ほとんど議論を活性化させることができませんでした。この点に関しては、勉強不足、発表技術の未熟さ等、猛省するばかりです。いつか再びこのような機会をいただける日まで、日々研鑽を積んで参る所存でございます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、寺沢さん、榎本さんの両先輩方の学術的なご発表から非常に多くを学ばせて頂き、実り多く会を終えることができました。改めまして、深く感謝申し上げます。



## コーディネーターとしての感謝

江利川 春雄 (和歌山大学)

寺沢拓敬氏の『「なんで英語やるの？」の戦後史』が刊行された直後、私は「ぜひ研究例会で多角的に議論したい」と思い立ちました。本書の基となった氏の博士論文の審査を担当して以来、その教育社会学的方法によるマクロかつ精緻な考察力、説得力、文章力に魅了されたからです。まさに目から鱗の連続で、戦後英語教育史研究の水準を一気に高める研究成果です。

例会は、本学会の若き俊英である青田庄真・榎本剛士の両氏による切れ味鋭い問題提起と、会場からの活発な発言を受け、たいへん刺激的な



討論会となりました。非会員を多く含む約 50 名もの参加者を得たことが、研究会としての成功を証明しています。今後の例会は、発表者が現れるのを受け身的に待つだけではなく、積極的に企画していく必要を再確認しました。

なお、寺沢氏は次の単著を準備中とのこと。旺盛な研究意欲に感嘆しつつ、上梓を楽しみにしております。末尾ながら、ご尽力いただいた寺沢、青田、榎本の 3 氏に、心から感謝を捧げます。

## 『日本英語教育史研究』第 30 号投稿論文の募集

研究紀要『日本英語教育史研究』第 30 号への投稿論文を募集します。奮ってご投稿ください。投稿締切は 10 月 31 日 (金) (必着) です。送付要領は次の通りです。

①送付先：〒331-0825 埼玉県さいたま市北区榎引町 2-176-4 佐藤 恵一

②提出方法：原稿は、執筆者名を明記したもの 1 部と執筆者名をふせたもの 2 部を上記送付先に郵送してください。また、受領連絡用に宛て先を明記した葉書を 1 枚同封して下さい。

- ・刊行は来年 5 月の予定です。以下の投稿規程、および標準書式をご参照ください。
- ・これまで論文が紀要に掲載されたことのない会員を対象に、「事前指導制度」を設けています。(一人 2 回まで。事前指導を受けた場合、投稿論文提出時に、事前指導をふまえていかなる改訂を行ったか、別紙に明記していただきます。) ご希望の方は、9 月 12 日 (金) 必着にて、上記宛先まで草稿(途中段階で構わない)を 1 部郵送してください。

## 『日本英語教育史研究』投稿規程

1. 投稿資格は、入会后 1 年を経過した会員とする。ただし、編集委員会の依頼による特別寄稿についてはこの限りではない。
2. 投稿論文は日本英語教育史の研究に資する内容のもので、未発表の論文であることが求められる。ただし、すでに口頭で発表し、その旨を明記している場合は、他誌等に投稿中でないことを条件に、審査の対象となる。
3. 各号に投稿できるのは、共著の場合を含め、ひとり 2 本までとする。ただし、そのうち第一著者となれるのは 1 本に限られる。
4. 投稿論文の分量は、キーワード、英文アブストラクト、図表等を含めて『日本英語教育史研究』の完成ページ(38 字×28 行)で 20 ページ以内とする。これを超過することが認められることもあるが、その場合も 30 ページを超えることはできない。また、20 ページを超える場合には、分量に応じて別途、印刷経費を自己負担するものとする。
5. 投稿論文の提出は、原則として、ワープロ、パソコンによる打ち出し原稿を正副 3 部提出するものとし、正本 1 部には著者名を明記し、副本 2 部には著者名を伏せるものとする。  
提出は郵送もしくは託送によるものとし、原稿とあわせ、受領確認用の宛て先明記の葉書を 1 枚同封したうえ、締切り日までに必着することが求められる。
6. 投稿締切りは、毎年 10 月 31 日とし、この日が日曜日の場合は、翌 11 月 1 日とする。これに遅れた場合には、受理が拒否される。
7. 投稿論文は、論文審査委員会の審査を経て、掲載の可否、および、論文、研究ノート、調査報告、その他との種別が決定され、著者に通知される。

8. 掲載が認められた場合には、審査委員会による指摘等を踏まえて完成原稿を作成し、指定の期限内に再提出するものとする。その際に、プリントアウト原稿ならびに電子媒体によるファイルを提出する。
9. 著者による校正は 2 回とし、変更は字句の修正のみとする。内容を改めた場合には別論文とみなされ、掲載が拒否される。
10. 抜刷りは 30 部を学会経費によって作成し、著者（共著の場合は第一著者）に対して無償で提供される。これを超えて抜刷りを希望する場合には実費負担とする。
11. 掲載された論文等の著作権は著者に帰属するが、著作権のうち複製権および公衆送信権の行使については日本英語教育史学会に委託される。
12. 『日本英語教育史研究』に掲載された論文等を他書・他誌に転載する場合には、転載先書名（予定可）・誌名、発行者等の情報を添え、表題を改める場合にはその旨を明らかにして、書面による転載許可願（書式任意）を編集委員会宛てに提出し、その許可を得るものとする。また、転載にあたっては、初出が『日本英語教育史研究』であることを明記し、号数、発行年を記すこととする。
13. 『日本英語教育史研究』に掲載された論文等を機関リポジトリを通じて公開する場合には、書面によって編集委員会に通知するものとする。

### 『日本英語教育史研究』投稿論文標準書式

投稿論文はワープロソフトを用いて、次の書式によって作成し、提出するものとする。

1. 用紙は A4 判を用いる。余白は上下左右とも 30 ミリとする。
2. 本文の文字のサイズは 12 ポイントとし、1 行あたり、和文の場合は 38 文字、英文の場合は 76 文字、いずれも 1 ページ 28 行とする。（注）参考文献の文字サイズは、10.5 ポイントとする。  
なお、英字・数字はすべて半角文字とする。
3. フォントは、和文は明朝体、英文は Century を用いる。
4. 和文のタイトルに副題を付す場合は、主題の後に全角コロンを付ける。
5. 和文の場合、句点は「。」（マル）、読点は「,」（コンマ）を用い、句読点やカッコは全角文字とする。
6. 見出しは、和文・英文ともゴシック体を用い、その前後に 1 行の空白を設ける。
7. 第 1 ページは以下の順とする。①論文題目、②論文題目の英訳または和訳、③執筆者名とそのローマ字表記（例 ERIKAWA, Haruo）、④日本語または英語のキーワード 3 語、⑤100～150 語の英文アブストラクト、⑥本文  
なお、正本 1 部にのみ、冒頭 8 行の範囲に著者名を記すこととする。
8. 提出原稿にはページを付すこと。
9. 引用方法、注、および参考文献の記載は、次の例を参考にすること。（以下略）  
（詳細は『日本英語教育史研究』29 号をご参照ください。）

※投稿論文に関する問い合わせ先： 日本英語教育史学会紀要編集委員会

e-mail: [kiyo@hiset.jp](mailto:kiyo@hiset.jp)

## ≫ 今後の研究例会の開催予定

- ◆ 第 249 回研究例会 2014 年 9 月 21 日 (日) 広島市で開催予定
- ◆ 第 250 回研究例会 2014 年 11 月 16 日 (日) 東京都で開催予定
- ◆ 第 251 回研究例会 2015 年 1 月 11 日 (日) 東京都で開催予定
- ◆ 第 252 回研究例会 2015 年 3 月 15 日 (日) 大阪市内で開催予定

発表を希望する会員は (1) 発表希望月, (2) タイトル, (3) 発表概要 (100~200 字程度), (4) 使用予定機器, 以上 4 点を明記の上, 発表希望月の前々月 10 日 (11 月発表希望であれば 9 月 10 日) までに, 日本英語教育史学会例会担当 (保坂芳男) までお申し込みください。

Email: [yhosaka@ner.takushoku-u.ac.jp](mailto:yhosaka@ner.takushoku-u.ac.jp) TEL&FAX: 042-665-3225 (拓殖大学・保坂研究室)

## ≫ 事務局より

### ≫ 理事会を開催

第 248 回研究例会に先立ち、7 月 20 日 (日) 11 時より例会会場隣室において理事会が開催され、以下の件が話し合われました。

#### (1) 役員 の 役割 分担 について

発展的かつ円滑な学会運営のため、役員 (副会長・理事・幹事) の役割分担を明確化し、あわせて紀要編集員を増員することが検討されました。また、同じ目的のため、会長・副会長・事務局長からなる三役会議を適宜開催することを決定しました (別項参照)。

#### (2) 学会創立 30 周年記念事業について

この 12 月に会が創立 30 周年を迎えることを記念して数々の事業を計画していますが、そのうち来年 1 月 11 日 (日) に記念行事としての開催が予定されている第 251 回研究例会について詳細を検討しました (別項参照)。

#### (3) 今後の学会の諸課題について

諸課題のうち、(a) 論文審査と紀要編集に関わる問題点を整理し、その是正案を検討しました。また、(b) 学会公式ウェブサイトを充実すること、(c) 会の公式文書のファイル形式を統一することなどを確認しました。

#### (4) その他

(a) 東京大会の収支が報告され、補助金を上回る額が学会会計に返還されました。あわせて、拓殖大学ならびに大会会長の山田政通先生よりご寄付いただいたことが報告されました。

(b) 来年 3 月 15 日 (日) に予定されている第 252 回研究例会は、大阪市の「四天王寺大学あべのハルカスサテライトキャンパス」を会場として使用させていただけることが報告されました。



## &gt;&gt; 役員 の 役割 分担 について

7 月 20 日 (日) の 理事会 で 決定 した 役員 の 役割 分担 は 以下 の 通り です。

副会長	馬本 勉 (運 営)	佐藤 恵一 (研 究)	
理 事	河村 和也 (事務局)	隈 慶秀 (紀 要)	田邊 祐司 (組 織)
	拜田 清 (大 会)	保坂 芳男 (例 会)	若有 保彦 (広 報)
幹 事	青田 庄真 (例 会)	赤石 恵一 (書 記)	榎本 剛士 (紀 要)

また、紀要編集委員会 は 以下 の 体制 と なり ます。

佐藤 恵一 (編集長)	保坂 芳男	隈 慶秀	榎本 剛士
-------------	-------	------	-------

## &gt;&gt; 学会 創立 30 周年 記念 例会 について

会 の 創立 30 周年 を 記念 し、以下 の 通り 「記念 例会」 を 開催 します。多数 の ご 参加 を お 待ち いた します。

シンポジウム：日本英語教育史学会 30 周年記念「回顧と今後への期待」	
パネリスト	小篠 敏明 (元会長・福山平成大学教授)
	島岡 丘 (筑波大学名誉教授 [シニア・プロフェッサー])
	茂住 実男 (拓殖大学名誉教授)
コーディネータ	竹中 龍範 (前会長・香川大学教授)

期 日：2015 年 1 月 11 日 (日)

会 場：拓殖大学文京キャンパス 国際教育会館 [F 館] (地下鉄丸ノ内線茗荷谷駅下車)

○ 例会 終了 後、茗荷谷駅 周辺 で 30 周年 祝賀 会 を 開催 します。詳細 は 追っ て ご 案内 しますが、今 の うち から ご 予 定 ください。

## &gt;&gt; 懐かしいものをご提供ください

記念 例会 の 当日、創立 30 周年 を 記念 する 小さな 小さな 《資料 展》 を 企画 して います。会 で 保管 して いる 史料 に は 限り が あり、会 員 の み な さ ま から 以下 の よう な 「懐かしい もの」 を お 貸 し いた だ き 展示 した く 考 えて おります。

- 全国大会・月例研究会 (現在の研究例会) の 記念 写真 や スナップ 写真
- 月報 (現在の会報)
- その他の通信や文書類

ご 協力 願 える 方 は、以下 に ご 一 報 いた だ ければ 幸い です。どうぞ よろしく お 願 い いた します。

宛先：河村和也 (個人 の 住所 ・ メール アドレス に つき、事務局 の もの と は 異 なり ます)
《郵便》〒212-0054 神奈川県川崎市幸区小倉 1-6-10-305
《電子メール》rivervil@d3.dion.ne.jp

## 第 249 回 研究例会のご案内

日 時： 2014 年 9 月 21 日 (日) 午後 2 時～5 時  
 会 場： サテライトキャンパスひろしま 6 階 604 中講義室  
 (県立広島大学サテライトキャンパス/広島県民文化センター)  
 〒730-0051 広島市中区大手町 1-5-3 TEL 082-251-3131

研究発表① 戦後日本の教育関連議論における英語教育：国会会議録を主な素材として  
 青田 庄真 氏 (東京大学大学院生)

1970 年代初頭まで、国会における教科教育関連の議論では「科学万能」の風潮のなか理科教育が寡占状態にあった。その後、英語教育関連議論の占める割合は増したが、かつての理科教育ほどの寡占ではなく、議論の関心を押し上げている主な概念は他教科からもアクセス可能なものであるため、理科教育同様に拡散される可能性がある。本研究では理科教育衰退時の構造を教科教育の枠組みを超えて析出し、英語教育との関係について議論する。

研究発表② 関係代名詞の訳出法：その変遷をめぐって

馬本 勉 氏 (県立広島大学)

本発表では、訳読の変遷を明らかにする研究の一環として、明治期の独習書に見られる訳出法の変化を取り上げる。今回は関係代名詞に注目し、漢文で言う「再読文字」のように二度にわたって訳出する方法から、現代的な訳し方に至る変化の実態を報告する。

参加費： 無料

問合先： 保坂 芳男 (メール: yhosaka@ner.takushoku-u.ac.jp TEL/FAX: 042-665-3225)

★会員外の方の研究例会へのご参加を大いに歓迎いたします。

【会場案内】(県立広島大学のウェブサイトより)

- ・広島駅から車で約 10 分  
(広電「紙屋町西」より徒歩 2 分)
- ・広島バスセンターから徒歩約 3 分
- ・広島空港からバスで約 60 分  
(エアポートリムジンバス)



**EDITOR'S BOX** この会報の編集作業を行っている時に広島のと砂災害のニュースを目にしました。とても心の痛む出来事で、今は行方不明になった方々の無事をただただ祈るばかりです。(若)